説教20200823フィリピ４：１‐９ 　79　　431　　502

説教　「主はすぐ近くにおられます」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　平和の反対語は何でしょうか。真っ先に思い浮かぶのは戦争でしょう。その次に思い浮かぶのは争いでしょうか。しかしわたしはここで平和の反対語として**恐怖**を提起したいと思います。実はこれはゆえないことではなくて、聖書には次のように記されています。

平和を望んでも、幸いはなく／いやしのときを望んでも、見よ、恐怖のみ。

主はこう言われる。戦慄の声を我々は聞いた。恐怖のみ。平和はない。

このような言い回しは複数の箇所にみられますので、或いは聖書の民がよく記憶していた文言かも知れません。

よく考えてみますと、平和の反対語として戦争よりも恐怖の方がふさわしいかも知れません。現実を言い当てているように思います。例えば、今私たちが置かれています状況を、表現してみますと、「私たちは新型コロナ渦中にあって、恐怖のみ、平和はない」と叫びたくなるような状況です。

フィリピの信徒への手紙を読んでいて、私たちは喜びと悲しみとがすぐ隣り合わせにあって、両者は入れ替わり私たちにやって来ることを聞かされました。それと同様に、実は平和と恐怖もすぐ隣にあって、私たちにやってくるものではないでしょうか。

マタイの福音書の山上の垂訓に「平和を実現する人々は幸いである」という有名な聖句がありますが、これも恐怖を**追い払い**「平和を実現する人々は幸いである」という意味で読めばしっくりくると思います。事実、私たちはどんな時も平和を実現する者とされています。特に今は、家族でもそうですし、２、３人が集まるところには悲しいことに必ず恐怖の種が存在します。その恐怖の種を私たちは、平和を実現することによって克服していかねばなりません。或いは克服していくことが出来るのです。そのためには祈ることも大変効果的です。有名なクリュソストモスの祈りというのがありますがご存じでしょうか。

祈ってみます。

今、この共同の祈りに心を合わせて祈る恵みを与えて下さった主よ、あなたはみ名によって心を一つにする二人または３人に、御心にかなう願いを遂げさせてくださると約束されました。どうか僕らの願いをかなえて益とならせ、今の世では主の真理を悟り、後の世では永遠の命の恵みにあずかることが出来るようにお願いいたします、というものです。

どうでしょうか、これを祈れば恐怖が去って行くのではないでしょうか。

平和の反対語が戦争であると今の私たちが強く意識していますのは、今の社会を生きる私たちがそのようにさせられているからでありましょう。学校教育などでも、決り文句のようにそれは植え付けられます。戦争を失くして平和を実現しましょう、などど私たちは再三聞かされています。一方、恐怖を逃れ平和を実現しましょうというのは、あまり聞かないのではないでしょうか。でも、山上の垂訓で歌われる平和の実現を、より身近で現実的な事柄として認識するためには、「恐怖を逃れ平和を実現しましょう」という方が近いような気がいたします。

平和の反対語が戦争であるという常識は現代社会の時代精神の反映であるともいえるでしょう。時代精神は、私たちの行動パターンを形作り、習慣づけます。このような、時代精神、行動様式、習慣のことをエトスと申しまして、聖書にもエトスという言葉は再三出てまいります。私たちは今の時代のエトスに縛られ生きるものです。その枠を私たち人間だけで抜け出すのは困難です。しかし主イエス様は、その時代のエトスを、御心に適うものへとするために、いつも戦っておられます。それは、あらゆる人知を越える神の平和を実現するための戦いでもあるのです。

本日読まれました、エレミヤの招きの言葉「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」ということを私たちはよく覚えておかなければなりません。私たち人間だけで平和を実現することは困難です。そして今の世の中のように国家や組織が平和を計画しているかのような思い込みは、私たちに恐怖を増さしめるだけかも知れません。平和を計画出来るのはただ主なる神だけなのです。ではわたしたち人間に何ができるのかといえば、それは平和を実現することでありましょう。平和を計画するのではなく平和を実現することが、私たち人間が主から託された献身なのです。

今日の聖書箇所には、私たちが主なる神の平和の計画に従って、なすべき平和の実現、その為の戦いや、実行についてのパウロの具体的な勧告が記されておりますので、見ていきたいと思います。初めにエボディアとシンティケという二人のご婦人のことが記されています。この二人はパウロと共に福音のために戦った同労者であり、命の書に名を記されている者たちの仲間です。非常に信仰深く、主のために献身している姿が浮かび上がりますが、この二人は、悲しいことに反目し合っているようです。ですからパウロはこの二人に主において同じ思いを抱き、喜びなさいと何度も勧めているのです。いかがでしょうか、ここには教会における一つの実情が記されているのではないでしょうか。私たちの信仰が深まれば深まるほど、献身すればするほど、私たちの間の不一致が深まってしまう、といったことは実際あることでしょう。そのようなことは当然起こり得ることなのです。ですから私たちはことさらに、何度も何度も、喜びなさいと言いながら、其の不一致にまつわる悲しみを消し去り、主にある同じ思いによる喜びの方に満たされるように努めていく必要があるのです。

それは、平和と恐怖ということについても言えるでしょう。私たちが恐怖におののくということは避けられません。又、それは悲しみがもたらさないための予防として必要なことでもありましょう。しかし恐怖だけでは平和は実現しません。しかし冒頭にも申しましたように、平和と恐怖は隣り合わせのところにありますので、私たちは恐怖を追い払い平和を実現することが出来ます。そうすることは私たちにとって幸いなのです。パウロは「主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。」といって、恐怖を追い払う方法を具体的に勧告しています。主がすぐ近くにいるということこそ、平和の源です。なぜなら、平和を計画しておられるのは主なる神ご自身であるからです。先週も申し上げましたように、私たちは、主イエス様の後ろにピタッとついて走りながら、いつも冠を受ける備えをしていれば、それは何と平和なことでしょう。恐怖は去り、私たちはあらゆる人知を越えた神の平和によって守られることでしょう。しかし先週も申しましたように、それは私たちが到達すべき完全な者の姿でありますので、誰もその完全なものとはなっていないのです。ですから、本日パウロが言っていますように、私たちは相補いながら福音のために力を合わせて共に戦い、喜びなさい、と言い合って行かなければなりません。

又、パウロは「あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。」とも勧告をしています。信者未信者を問わずすべての人に私たちクリスチャンの広い心が知られるようになっていく、このことの重要性をパウロは述べています。私たちクリスチャンの広い心は、まさに平和の源であり、隣人に告げ知らせるのに値するものです。世のすべての人にとって、クリスチャンの広い心は、一回接しただけではただ奇異なものとして受け止められるかも知れません。それがどう受け止められるかは分かりません。しかし私たちはあきらめる必要はありません。なぜならば私たちが神の平和の計画を信じ、それに献身をしているということは、平和の実現そのものであるからです。

私たちの信仰が揺らぐとき「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」というぱうろの勧告は大いに励ましになります。

私たちが日々祈りと願いを捧げている主なる神とは、どのようなお方なのでしょうか。それは世の中にはびこっている、いわゆる御利益信仰の神様とは全く違う方です。だからこそ私たちクリスチャンは世の中の人たちとは違う、広い心を持つことが出来るのです。では、私たちが求めているものを神に打ち明ける時、それは御利益を願う祈りとどう違うのでしょうか。非常に有名な聖書箇所を引きますと、ゲッセマネの祈り、例えば、マタイによる福音書２６章３６節から、新約聖書５３ページになります。主イエス様はうつ伏せになり、祈って言われました。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」クリスチャンの祈りが将にここに記されています。私たちは、自分たちの過去の経験や、自らの抱く計画に沿って、その時々に、様々なことを神様に願い祈り、願わくはその願いが適いますようにと祈ります。私たちがそのような自らの願いを離れて、完全に神の御心だけを願い祈ることは困難です。ですから私たちは常に祈りの最後に主イエス・キリストのみ名によってといって、キリストの執り成しを諮っているのです。キリスト御自身も先ず、自らの思いを口にされ、それから、しかしわたしの願いどおりではなく、御心のままに。と続けられました。私たちは、自らの願いを大切にしながらも、最終的には主なる神の御心に従わされるのが幸いなのです。

そのように思える私たちクリスチャンの信仰を守るのも、又主なる神ご自身です。先週の話に戻しますと、遠くのかなたに幸いを探し求めがちな私たちを、今、ここにある神の国に引き戻して下さるのも主なる神です。又、人知を越える神の平和をもたらされる主なる神も、今、ここにおられて、私たちを守られるのです。

このように語っていきますと、逆に、なんでも私たちの思い通りのことをかなえてくれるいわゆる御利益信仰の神様にまつわる恐怖が明らかなってくるのではないでしょうか。

ですから私たちは、大いに喜んで私たちの広い心がすべての人に知られるように努めていきたいと願います。

８節からパウロは、語調をかえて、当時の世の中の判断基準に沿って述べています。「終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。」ここで述べられている真実、気高さ、正しさ、清さ、愛すべきこと、名誉なこととは、聖書を離れて当時の世の中の言葉を用いて、当時の世の中のエトスのことを念頭に置いてパウロは語っています。

私たちは現状置かれているエトスに縛られて生活をしています。又そのエトスから自力で抜け出すことも出来ません。それでもなお私たちは今おかれた現状をよく知っておかなければなりません。そうすれば、私たちはその中に働く神の力を、より近くにいて受けることが出来るのです。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父なる神様、この主日にこの兄弟姉妹を御前に集め、あなたを礼拝賛美出来ます幸いに感謝いたします。あなたは全ての悲しみ、恐れを、喜び、平和へと変えられようとしています。どうか私たちがあなたのそのご計画を信じ、その強い御手に寄り頼んで、それを実現する者へとさせてください。

今の世の中の状況に置かれ、私たちは、あなたに多くを願い祈りながら、何も実現できないのではないかという不安を抱いています。どうか、私たちにゲッセマネの祈りのひたむきさをお与えください。私たちの願いをはるかに超えて与えられます、あなたの平和のために私たちが献身していくことが出来るようにして下さい。

主よ、今、病に悩む方を癒し、医師や看護される方々に知恵と力を与え、愛と忍耐によって、御心に適うよい業を行わせてください。

全能の神よ、新型コロナウィルスがもたらすすべての恐れから、私たちを慈しみのうちに見守って下さい。平和の源であるあなたから、私たちが離されないようにお守りください。

父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配しておられます、私たちの救い主イエス・キリストのみ名によって祈り願います。